

光を造形要素として取り入れた立体作品

The Use of Light in Contemporary Sculpture

キーワード：

光
彫刻
LED 蛍光灯
自然
植物

自然素材を使った作品内部に蛍光管を曲げた光を入れ、強烈な対比的状況を設定した立体作品

寄生蛍光体

大きさ：約 h130 × w30 × d30cm
素 材：木、LED 蛍光灯、100v 電源 等
発 表：国画会彫刻部秋季展 2016年 11月 8日～11月 15日

曲った光

大きさ：約 h45 × w45 × d120cm
素 材：枝、LED 蛍光灯、100v 電源 等
発 表：Contemporary Art 2017 2017年 1月 12日～1月 31日

光る惑星

大きさ：約 h120 × w120 × d120cm
素 材：蔓、IC、LED 蛍光灯、100v 電源 等
発 表：国展 2017年 5月 3日～5月 15日

紹介する3点の作品はいずれも光（LED蛍光灯）を造形の主な要素として取り込んだ作品である。従来の蛍光灯はガラス管内にアルゴンガス等が密封され電極に電流を流すことで放電し、発生する紫外線を蛍光体にて可視光線に変換する光源であった。そのため今回の様に蛍光管を曲げるためには製造過程でガラス管を前もって曲げるほかなかった。今回使用したLED蛍光灯は蛍光灯という同じ名称が使用されていても全く別物でLEDチップをライン状に並べて発光させたものである。LEDそのものは直流電源による点灯仕様であるため、LED蛍光灯はAC/DCコンバーターを内蔵しており100vの交流電源からの直接入力を可能としている。また従来の蛍光灯の支持器具を代用することを前提としているため蛍光管の両端からの電源入力を前提として作られている。このため今回の作品では組み立ての簡易化を考慮して、AC100v電源の2線とも片側からの電源入力ができるよう仕様変更を加えた。また蛍光管を曲げることが可能な素材である塩化ビニル樹脂に変更している。

「寄生蛍光体」は木の丸太の内部に入り込み寄生している虫をイメージしており、木を彫り込み2本のLED蛍光管を螺旋状に巻きつけたものである。直接目視するとその強い光は木の材質感をかき消し、やがて宿主を滅ぼす寄生物の恐ろしさを象徴する。

「曲った光」も同様にLED蛍光管と自然の木の枝を使った作品である。木の枝を逆さに立てその枝に沿って2つのLED蛍光灯を巻きつけたものである。木の枝ぶりに沿って形成された光の弧は、本来その形を作り出しているはずの枝を超えて自己主張をし始める。

3つ目の作品「光る惑星」は蔓とLED蛍光管を球体にまとめた作品である。蔓は干からびて骨のようになっており、IC基板にプログラムされたタイミングで光がけたたましく点滅する。それは私たちが住む地球の未来をモデル化したものである。

地球の表面のうち陸地は約30%であり、そのうち大地に水分を蓄え植物が生い茂ることが十分可能である地

域は更に限定される。しかし私たちの日々の営みはこの限られた地からあまりにも多くのものを搾取し続けている。

近年温暖化やオゾン層の破壊等への様々な警告がなされ、この星の未来を守るための取り組みが叫ばれているが、近代化・工業化のスピードとのバランスが取れているとは思えない。このまま限りなく豊かさを追い求めて地球資源の枯渇を待つのか、持続可能な社会の実現に向けて舵を切り直すのか、喚起を促すための危機感の形象化を試みた。







〈作品〉

夏池 篤

32

光を造形要素として取り入れた立体作品

